

蒙古斑

今月は赤ちゃんによく見られますが、あまりその後の変化について知られていないためか、よく質問を受ける「蒙古斑」についてまとめてみました。

蒙古斑とは**下半身の背中**の部分（腰から背中にかけて）に見られる灰青色の**大きな斑点**のことで、**盛り上がりはありません**。

面白いことに境目はしっかりしていると書いてある医学辞書と、はっきりしないと書いてある医学辞書があります。人の主観はこれほどに違うということ分かります。

蒙古斑は、**生まれて間もなくから一週間以内で目立ってきます**。

この原因は、皮膚の内部の真皮層というところに黒い色素を持ったメラニン細胞という細胞があるため、その部分が表面からは灰青色に見えることによります。

黄色人種のほとんどに見られ、日本人では99.5%に見られます。

つまり無いほうが珍しいということになるわけです。

実は黒人でもほとんどの赤ちゃんに存在するのですが、メラニン細胞が多いために目立たず、逆に白人にはメラニン細胞がほとんど無いため認めません。

<蒙古斑はどうか？>

2歳以降になるとこのメラニン細胞が減ってきて徐々に薄くなり、思春期までには消えていきます。

ただし13歳でも3%に残っているという研究もあります。

成人になるとほとんどは消えてしましますが、まれに残っていることがあります。

これが精神的に成長していない人間への軽蔑的な言葉として「青二才」とか「尻の青身の取れないやつ」という言葉で表現されます。このいわれも蒙古斑がまだ消えない未熟なやつ、というところから来ているのです。

<異所性蒙古斑>

ところで、**お尻以外の手足や顔、体にも蒙古斑が出来ます**。

この蒙古斑を異なる場所にできたということから「**異所性蒙古斑**」と呼びます。これはお尻の部分より色が少し濃いことが多く、**消えるのにもお尻のものより時間がかかる**ことが多いことが知られています。

私の知人がアメリカで出産したところ、アメリカでは珍しいため赤ちゃんはこの蒙古斑の写真を撮られまくったそうです。所変われば何とやらです。